

乳幼児教育の質の向上研修ニュース

発行日 平成28年8月31日
発行者 舞鶴市健康・子ども部

6月17日(金) 舞鶴幼稚園 公開保育を実施しました。



今年度1回目の公開保育を舞鶴幼稚園で実施しました。各保育所・幼稚園から約60名の参加があり、神戸大学大学院准教授北野幸子先生から乳幼児教育を学んでいただくよい機会となりました。

子ども達は日々続いている遊びを楽しんでおり、その遊びを工夫する姿や、遊びにつながるものをイメージして作る姿が見られました。そこに関わる保育者や環境についてもご指導いただき、改めて環境構成の重要性や意図的なねらいを持った保育者の関わり大切さを学ぶ機会となりました。

参加園

永福保育園	朝日幼稚園
岡田保育園	朝来幼稚園
さくら保育園	池内幼稚園
タンポポハウス	倉梯幼稚園
平保育園	シオン幼稚園
東山保育園	橘幼稚園
八雲保育園	三鶴幼稚園
うみべのもり保育所	舞鶴幼稚園
中保育所	
西乳児保育所	

環境構成の時は、遊びと動線と子どもにとってどうか、ということを第一に考える ～北野先生のコメントより～

<砂場～5歳児樋遊び～>

5歳児が中心となって、砂を掘って温泉にする遊びや樋やビールケース、板等を組み立てて水を流す遊びを楽しんでいました。そこに関わる保育者や子ども同士が試行錯誤する姿から、参加者も多くのことを学びました。



北野先生より

◎5歳児が砂場にいることでダイナミックな遊びになり、3、4歳児もその様子を見たり、混ざったりしてよかった。

◎5歳児が試行錯誤する様子が見られた。保育者が子どもの試行錯誤を支えることは大事だが、どこまで関わり、どこで引いて見守るかが重要で難しい。これが正解というものではなく、関わりは無限にあると思う。◎子どもがどうしたかったか、どう考えていたかを把握し、関わること。保育者は、何をそこでねらいとし、何を大事にするかも意識するとよい。

担任の思い：ゴムで固定することを思いつき、樋をなんとかしてつなげようとしていた子どもの思いを支えたかった。いつまでも樋を持って関わっていることはよかったのか、他の方法があったのではないか？

北野先生：大事にしたいことは、勾配と流れるところが見えることだと思う。結果としてくずれてしまい、別の樋に変えてつながったが、水が流れるところは見えなくなり、勾配もなだらかになってしまった。保育者がそこで樋を持たずに、少しビールケースを移動して、まず固定するとよかったかもしれない。もう一人保育者がいれば、連携しながら関わることもできたかもしれない。

参加者の記録：樋をつなげたかった子もいたが、そこで板で樋を固定しようとしていた子もいた。その二人の思いのズレもあり、懸命に固定しようとする子にすると動くので崩れてしまい、つなげようとしている子にとっては、崩れるのでうまくつながらず、それぞれ思いと違うので言いあいになる場面もあった。

※保育者には、その場面においてどう関わればよいのか？即座に判断していく力、臨機応変に関わる力が必要とされる。同じ場面を見ていても、関わりは一つではない。どれだけ、関わりを引出しを持っているか、どれだけ子どもの姿を見ることができているか、が大事ではないか。



<3歳児 色水遊び、泥で感触遊び ごっこ遊び>

3歳児の子どもたちは、園庭の草花を使って色水作りを楽しんでいる様子や砂場でごっこ遊びを楽しむ様子、水たまりにできた泥に触れて遊ぶ様子が見られました。

北野先生より

◎色水、泥、砂場それぞれの遊びの環境設定が遠すぎて、他の遊びの様子が子どもに見えず、遊びがつながりにくい。

◎色水遊びの場所を砂場に近付けるともつつながる。お料理ごっこ遊びの中に砂のもの、花のもの、色のある水…つながっていきそうな要素はたくさんあった。

◎偶然できた水たまりの泥遊びでは、感覚遊びという経験の段階ではなく、次の素材に気づいて、作り出す遊びの段階にきていると思われる。道具やごっこ遊びにつながる玩具を置く等の工夫をするとよい。



<4歳児 ガソリンスタンドごっこ>

三輪車遊びが大好きな子どもたちが保育者と一緒にコースを作り、ガソリンスタンドをするために必要な物を作って、それを使って遊ぶ姿が見られました。



北野先生より

◎園庭の端を通るコースは、葉っぱが緑の屋根のようになっていたり、狭さや起伏があったり、築山をすべったり（この日は見られなかった）とてもよかった。

◎ガソリンスタンドの場所や必要な物を作る場所が、他の子どもたちから見えにくく、カードやスイッチ、ボタンの工夫やおもしろさが伝わりにくいのではないか。

◎ガソリンスタンドの場所は、園庭の真ん中ではなく、築山やコース上にあり、砂場からも見える距離の場所に置いてはどうか。

◎環境設定の時は、遊びと動線と子どもにとってどうか、ということを第一に考えるとよい。



＜指導案＞

◎指導案の中に子ども達の室内遊びの予測がどれくらいあったのか。指導案を書くということは、あんなことあんなこと…と予測して頭に入れている。そして、実際に保育している時にそれが残っていて動きにつながってくる。

◎指導案に3歳児はごっこ遊びのこと、4、5歳児は製作ということが部屋の中の活動として入っていたが、実際どうだったかを保育者間で振り返ることは大切である。
◎今回は、指導案の中にはあんまりたくさん書いてなかったが、指導案を書く時点でしっかり予測し、安全確保等考えることが大事ではないか。

＜環境＞

◎園庭を見ると、でこぼこが少ない。水たまりができて活用していたのはすごくよかったが、幼児期に育てたいのは重心の移動とバランス感覚なので、そういう意味では狭いところに入って行くコースのイメージができて、そこに築山があってすべり降りて、ぬかるみがあってというのは、とても良い環境である。

◎運動発達の専門家の研究によると、広すぎると子どもの運動発達に関しては動きが実は少なくなってしまうとも言われている。それは、他の子どもがあまり見えないため、動かないとも言える。

◎先生方が本当にあっち動いたりこっち動いたり暑い中ほとんどよく動いてらっしゃった。すばらしいと思うけれど、いろんなところ行くのはすごく遠くて大変。だから、自分の動きも子どもたちの動きも見えるところ、先生が入って言葉がけをした

り、ちょっと物を追加して置いてあげたりができる環境が大事だと思う。広い環境をどうやって把握できるかという工夫が必要ではないか。

◎チャレンジしてほしい。環境はどんどんチャレンジして変えていく。子どもたちの変化から評価する。

◎コーナーの作り方も、色水遊びだとかサーキットの遊びとかいろんなものをこっちに置いてみたらどうなったか、あっちに置いてみたらどうだったのかを研究して行ってほしい。

◎クラスを全部一階におろすとよい。理想の園は平屋。

◎子どもが発想し、物を取れる場所が近い方がよい。そして、外に出たり入ったりがもっと頻繁になる。だから室内遊びで作ったものが外遊びの中の製品にもっとなっていくということもある。二階だと厳しいように思うので、全部一階にする方が子どもの遊びが変わるのではないか。

◎室内に自然を観察できる環境がたくさんあった。5歳児は、まさしく協同的な学びと探求する環境が整えられていた。自然が入ったり、その探求にどうやって発達的に高まっていくかということも、それぞれのクラスの中での自然の物の関わり、科学の物の関わりの発達が部屋から見られた。

◎ままごとと絵本のコーナーはしっかり整えられていたが、3歳児にはあのマットは硬いように感じた。イスのようなもの

が、絵本のところにあった方がよい。3歳児は小さいのでべたっと座るにはあそこは硬いから、柔らかいクッションかソフト積み木か、ちょっとイスになって座れるようなものがあるとなおよい。小さい子の部屋のほうが布素材、やわらか素材のものを入れた方がよい。

◎製作のコーナーは、3歳児は、まだまだ製作遊び、廃材を使った遊びを経験してほしい。また、発達に合わせて、テープの切りやすさ等環境の工夫をするとよい。

◎子どもの姿からの環境ではあるが、促す環境の方もいくつか考えるということも必要ではにか。製作は作りたくなるようなものを見せるのもよい。

＜保育者の関わり＞

◎園庭で青いラインを引いている子がいたが、引くことが遊びになってしまっていた。ラインを引いて三輪車がその後をついて行くようならよいが、遊びとの関係性も意識して関わっていくとよい。

◎砂場で保育者がお客さん役になって関わっていたが、何をつなぐのか、何を学んでほしいのかを意識して関わってほしい。



6月17日(金) 講義・グループワークを実施しました。

講義「ドキュメンテーションとは」

乳幼児期の子どもは体験・経験的に学ぶという発達の特徴があり、小学校以降の教科書から概念的に学ぶ形とは大きく異なる。

プロジェクト型保育は、子どもの興味や関心を起点としたテーマを探究し掘り下げていく保育であり、乳幼児期の発達に適した、遊び中心の環境を通じた教育と言える。

しかし、保育は、何をしているのかが見えにくい。遊びに夢中になり、探究する子どもは多くのことを学んでいるが、多くの人には見えない。

見えない学びを可視化する一つの方法として「ドキュメンテーション」がある。ドキュメンテーションとは、「子どもが○

ドキュメンテーションとは・・・

子どもの事実を元にした育ちや学びの見取りやその見通し、時系列的な変化などを書いた教育的な記録でもある

～北野先生より～

○していた。□□と言っていた。」という断片的なドキュメントではなく、子どもの事実を元にした育ちや学びの見取りやその見通し、時系列的な変化などを書いた教育的な記録でもある。

◎時系列的な変化（プロセス）を大事にしたドキュメンテーション…

- ・興味・関心を深めている様子
 - ・体験している様子
 - ・気づいたこと、感じたこと表現している様子
 - ・子どもたちの話し合いの様子
 - ・調べたり、比べたり、深めている様子
- これらを意識して書く。

◎ドキュメンテーション作成のポイント

- ・発達の視点
 - ・育ちや学びの視点
 - ・5領域の視点
 - ・保育者の教育的意図（ねらい、かかわり）
 - ◎可視化の目的
 - ・保育を可視化
 - ・保護者に伝える、知ってもらう
 - ・子どもが見て共有し、振り返り、評価する
 - ・他のクラスの保育者も共有し、自分の保育を振り返る
- ※根拠となる事実を書くことや「できた」「できない」にならない配慮が必要になってくる。

グループワーク

5つのグループ（1グループ7～8人）にわかれて、事例の記録を元にグループワークを実施しました。いつもは、皆さんに書いていただいたドキュメンテーションを元にグループワークをするのですが、初めて参加される先生方も多く、まずは、記録を取る際に必要な保育を見取る視点を学んでいただくとう実施しました。

視点を定めるためのワークシートは、ドキュメンテーションを書く視点と同じでもあり、園へ持ち帰って活用していただけたらと思います。また、今回は、事例の遊び（保育）を保育所保育指針と幼稚園教育要領の5領域でとらえるという試みもしています。ほんの20行たらずの記録、時間でいうとほんの数分（活動は前日から続いています）ですが、この中に5領域がすべて含まれていました。遊び一つ一つを丁寧に見取ることの重要性を改めて感じました。

また、どのグループも同じ事例で話し合いを進めたことで、報告の際に理解もしや

すく、共有しやすいという利点もありました。しかし、同じ事例であってもグループによって議論された内容は様々で、改めて保育の奥深さを実感しました。

今日のように保育を語り合うことは、自分の考えをまとめて話したり、自分とは違う視点で保育をとらえたり、自分の保育の引出しを増やすことにつながる効果もあります。

ぜひ、このようなグループワークの方法を園内に持ち帰り、園内研修として活用していただきたいと思います。

※自園でも試してみたいと思われる場合は、乳幼児教育コーディネーターが事例等を準備して、ファシリテーターとして参加し、園内研修のお手伝いをさせていただきますので、気軽にお問合わせください。（幼稚園・保育所課 乳幼児教育推進係 TEL66-1009まで）

参加園

永福保育園	朝日幼稚園
岡田保育園	朝来幼稚園
さくら保育園	倉梯幼稚園
タンポポハウス	舞鶴聖母幼稚園
平保育園	舞鶴幼稚園
東山保育園	
やまもも保育園	
八雲保育園	
ルンビニ保育園	
うみべのもり保育所	
中保育所	
西乳児保育所	



グループワーク(内容)

【事例】5歳児 2月 「氷の実験」

前日の振り返りの話の中で、氷が話題となる。「冷凍庫に水を入れておくと氷になる」ことはよくわかっているが、①寒い戸外で水が氷になることは、より興味・関心をかきたてられたようだ。

保育者が、②中庭の手洗い場付近にペットボトルやプラスチック皿、バケツなどの容器を用意しておくと、子どもたちは③めいめいの容器に水を入れて帰った。

子どもたちは登園すると、③すぐにおおの皿を見に行った。

④「やった。実験成功」

「わたしの氷厚いよ」

「ぼくのほうは、すごくきれい」

口ぐちに言いながら、友達のものとは比べたり、自分の氷を見入ったりしている。

⑤Sは手にした氷を太陽にかざして、

「せんせい、水って手で持てるん知ってる？」と言う。

「えっ！」と私が聞き返すと、

Sは得意そうに

⑤「ほら氷を持っています。次は、手品で水にします」と、

手の熱でぼたぼたとしずくを落とす氷を差し上げている。

⑥「すごい発見ですね」と私が言うと、

彼女は⑦「すごい手品です」と言い返す。

私は、⑧「失礼しました。すごい水のマジックでした」と言う。

そばで聞いていたTは

⑨「ぼくももっとすごい手品してやる。ほら、顔がお化けになるぞお」

と手にした氷を顔の目の前にして突進してきた。

【グループワークの方法】

人数：5～6人 時間：約60分

(1) まずは、一人で事例の中から1～4の視点に基づいて読み取る。

1. 子どもの姿、思い
2. 保育者の関わり、意図、ねらい
3. 環境（意図的な環境設定）
4. 保育の中の学び、育ち

(2) 1～4の順番で意見を言っていく。その際に、理由も加えながら言う。

(3) 全員で事例を5領域でとらえてみる。どこの部分が、どの領域のどのねらいや内容に当たるのかを検討する。

(4) 全員で事例からの続きの保育を展開するとしたら…どんな環境を準備するか？どんな言葉をかけるか？を考える。

【グループワークのルール】

- ◎個々の意見を否定しない
- ◎全員が発言できるように

【グループワークでの主な内容】

※左記の事例の番号と下線ごとに整理しています。

- ①保育者のねらい、意図…子どもの興味・関心をより深めるために
- ②意図的な環境…保育者は子どもに、置く場所やいろいろな形の容器によって、氷のはり方の違いに気づくことも意識している
- ③子どもの思い…「こおるかな?」「どんな風にかおるのか」期待、予測
- ④子どもの姿、学び…予測し、結果を確かめる 色、形、厚さなどに気づく 友達の水と比べる 観察する 言葉で表現する

⑤子どもの学び、思い…氷は熱によって溶け水になることを知っている。その科学的な現象を「水は手で持てる」「手品」という不思議さやファンタジーの世界で表現している

⑥保育者の関わり、意図…子どもに共感している、氷と水の科学的な変化の探求に向かうのか、手品という不思議な世界を楽しむのか、確かめるための言葉

⑦子どもの言葉、思い…氷が熱で溶ける「発見」ではないという子どもの思い

⑧保育者の関わり、意図…子どもの思いが科学的な探求ではなく、手品という不思議さを楽しむ方向に向かっていることがわかったので、間違いを謝り、新たに「マジック」という言葉で表現した

⑨子どもの言葉、思い、学び…「手品」「おばけになる」という不思議さおもしろさを楽しむ世界を友達と共有している、氷がレンズの役割を果たし、変化する科学的な現象を体験として知っている

◎水と氷の変化という科学的な現象を不思議さ、ファンタジーの世界で表現しているおもしろさがある。保育者は、科学的な気づきや発見に注目しがちだが、子どもは保育者の意図とはまた違う視点で、この遊びをとらえており、そこに保育者は気づき、子どもといっしょに楽しんでいる。

◎この続きの遊びをするなら、その他の科学的な現象をマジックとして楽しんだり、氷を作ることをいろいろな容器や場所で試すなどの科学遊びとして楽しんだり、いろいろな展開がある。

乳幼児教育ビジョン講演会～乳幼児期に大切にしたいこと～を実施しました。

保育所・幼稚園の先生方の研修とあわせて、市民の皆さんに「舞鶴市乳幼児教育ビジョン」や、乳幼児期の重要性、特徴、大切にしたいことなどを知っていただき、みんなで一緒に舞鶴の宝ものである子どもたちを育もうと講演会を開催しました。会場ではお子様連れのご家族の姿も見られ約160人の参加がありました。

日時 平成28年6月18日(土) 13:30～15:30
 場所 中総合会館 ホール
 講師 神戸大学大学院 准教授 北野幸子氏
 (教育学博士、前舞鶴市幼児教育ビジョン策定懇話会会長)



参加園

岡田保育園	西乳児保育所
相愛保育園	朝日幼稚園
タンポポハウス	朝来幼稚園
なかすじ保育園	倉梯幼稚園
東山保育園	シオン幼稚園
八雲保育園	ひばり幼稚園
やまもも保育園	三鶴幼稚園
うみべのもり保育所	舞鶴幼稚園
中保育所	

「～子どもの気持ちを知ろうとすること～が乳幼児期に大人が大切にしなければならないこと」

「感情と共に体験・経験を通して育つことが、生きる力の基盤になる」

～北野先生より～

◎舞鶴市の作ったビジョンは、大人がただ作っただけのものではなく、地域の中で次世代を育成していこうという画期的なもの。ビジョンを作ることで次世代育成のコミュニティが創生されつつある。

◎乳幼児期は、子ども自ら興味関心を持ったり、やりたい気持ちや探究心を起点とし、自分で考えやってみるといった、主体性を大切にしたい遊びを通じた学びが重要。

◎年齢に関わらず、発達に合わせた教育の保障が大事。教育のカギとなるのは先生の力量。洞察力が子どもの育ちに与える影響が大きい。乳幼児期の教育の重要性を共通認識としておくことが必要。

◎小学校以降の教育の前倒しが乳幼児期の教育にふさわしいというわけではなく、乳幼児期は、その発達に応じて、発達に合わせた方法がある。

◎2歳児は自己主張が強い。もともとよく使う言葉は「自分が」「ダメ」「いや」。その理由は、この頃になると身体の動きがしっかりしてきて、行きたい所へ行き、したいことができるようになる。それが自信になるので、「自分でしたい!」という思いを出すようになる。そういう時期は、人に言われてやることよりも、自分がやってみたいことをやった方が、子どもたちには経験としてふさわしい、というのが発達の理由。

◎動きの面では、乳幼児期はいろんな動きを体験し、その多様な動きが、その先の特定の動きをするための基礎となっていく。

◎運動遊びでも自分が「したい」と思ったものに取り組む方がこの時期の体験としてはふさわしい。子どもの気持ちを考えることが大切。

◎家庭教育と集団保育との違いは、「多様性に対する寛容性」にあり、(他の子の存在や他の子との遊びが)子どもの社会性を育てる。その中で知性も育っていく。

◎支援の必要な子どもこそ早くから専門的な教育が大切である。教育格差を生まないためにも、経済的に厳しい子にとって3歳までの集団保育を受けることが重要である。

◎日本でも乳幼児期の教育の質向上へ

の取り組みがいろんな所でスタートしている。去年4月に文部科学省の国立教育政策研究所で乳幼児期の教育専門のポストができた。8月には東大に発達保育実践政策学センターが、今年の4月には幼児教育研究センターができた。地方との研究拠点作りが日本の乳幼児教育の次のステップになる。

◎乳幼児期の教育で大切にしたいことは「発達に適した保育」。生れてからの期間が短いということは、個人による違いが大きく影響するという。みんなで一斉に同じことをするのはなく、子ども自身の個性に応じて一人ひとりの子どもの興味を大切にしたい教育を大事にしたい。

◎ただ遊んでいるのを見守っているだけではなく、どんな力をつけたいか、どんな学びを得ているか、それにはどんな材料(教材)を用意すれば良いかなど、保育者が見通しを持つことも大切になってくる。

◎専門職である保育者はこれらを理解し、子どもが主語になるような声かけも行える。

◎子どもが主体的になるには、安心感・信頼感が大切になり、自分の思いを受けとめてもらえるという安心感が、子どもの育ちの根幹になる。クラスが崩壊していたり、いじめのあるクラスでは子どもの力は伸びない。

◎クラスや地域が安心できる自分の大好きな場所であることが、自分を発揮できる、物・人への興味を広げられることへとつながる。それらが基本的な生活習慣、学習、社会性にもつながっていく。

◎このため、気持ちの育ちを乳幼児期には大事にしていく。乳幼児期の子どもは「耳」からだけでは学ばない。体験と気持ちが関わっていることでないと、子どもたちは自分のものにできない。

◎基本的な生活習慣は、愛着の形成と基本的信頼感があること、大好きなモデルとなる人がいて、そのモデルと一緒に模倣しながら繰り返し体験していくことが大切になる。

◎愛着の形成、自尊感情の有無が子どもの育ちの根底にある。子どもをしつける時は、子どもの誇りにつながるようにしなければ定着化しない。乳幼児期は感情に左右されやすい。良いイメージを持ちながらしつけていく。

◎主体性は選ぶところから。与えられたことを行うのではなく「自分から」ということが大切。小学校の新学習指導要領でも、アクティブラーニングという学び方が盛り込まれ、何を学んだかだけでなく「どのように学んだか」を大切にしている。

◎(目標への情熱や粘り強さ、社会性、自尊心など)非認知的能力を乳幼児期に育てていく。大きくなってからでは育ちにくい。与えられたこと、指示命令だけで蓄積された経験、分かった・分からないだけで育った子どもは知性の扉を開くことができない。また、いざこざの経験をさせてもらっていない子は、問題解決の力が育たない。自己主張のぶつかり合い、人との関わり方を感情と共に体験していくことから学んでいく。

◎子どもの気持ちを知ろうとすることが乳幼児期の子どもを育てるうえで、大人が大切にしなければならないこと。感情と共に体験・経験を通して育つことが、生きる力の基盤になる。大人の思いだけでなく、子どもの「やりたい」思いを大切にしていく。

◎乳幼児期の教育は、子どもの気持ち・興味関心を見とる洞察力がなければ行えない。そのために専門性が大切になり、保育の可視化をしていかなければならない。

◎乳幼児期の子どもの育ちは、小学校以降の学びの基となる大切なものである。そのことを広く知ってもらいたい。

